

初期ジャイナ教の教理

—bandha について—

杉 岡 信 行

序

ジャイナ教において、bandha (結縛) は、教理上重要な概念を荷っている。この用語は一般に、七つあるいは九つの概念から成立している根本真理 (tattva) の一つに数えられている。

Tattvārthadhigamasūtra (以下 *TAS*) は、学僧 *Umasvāti* (*Umasvāmi*) の手になる、白衣・空衣の両派から権威ある綱要書と見なされているが、その第一章第四スートラには七つの tattva (以下 7 tattva) が次のように述べられている。

jīva-ajīva-āsrava-bandha-saṃvara-nirjārā-mokṣas tattvam (*TAS* 1-4) 活命と非命と漏入と結縛と遮と滅と解脱とが「七つの」根本真理である。

ところで、*Umasvāti* は、この綱要書をまとめる時、初期ジャイナ聖典から大きな影響を受けているが、*tattva* の構成についても同様である。

さて、初期ジャイナ聖典では根本真理は、九つの句義 (*padārtha* ② 以下 9 *padārtha*) として述べられている。例えば、*Thāṇaṅga* ③ 第九章には *sadbhāva-padārtha* として次のように見える。

na va sabbhāvaṇapayathā pannaṭṭā, taṃ jhā—
jīvā, ajīvā, puṇṇam, pāvam, āsavo, saṃvara,
nirjārā, bandha, mokkho / (*Thāṇaṅga* 9)

9 *padārtha* の 7 *tattva* とを比較して、その相違点を明らかにすれば、*puṇṇa* (*puṇya* 善) と *pāva* (*pāpa* 悪) が多いわけであるが、この二つは理論的に漏入 (*āsrava*) の中に含めて考えられるというところである。むしろ

に、bandha の位置に異同が確認される。すなわち、ṛtattva においては bandha は asrava と samvra との間に位置するが、ṛpadārtha は nijarā と mokkho との間に位置している。

この相違をいかに受取ればよいであろうか。ṛtattva も ṛpadārtha も概念相互の次第性が尊重される理論であると考えられるので、bandha の順位の異同は、その概念の意味性にも差異が予想されるかもしれない。

本論は、初期ジャイナ聖典 *Suyagadanga* の第一篇と第二篇(以下 *Sūy I* と *Sūy II* とする)とから主な資料を提出し、その分析を通して bandha が、かかる ṛtattva あるいは ṛpadārtha の一概念を荷うまでの過程について、そのアウトラインを描くことにある。なお、初期ジャイナ聖典は、特にことわりのない限り、*Jaina-Agama-Series* 版 (Bombay) を使用する。

一

根本真理 ṛtattva において bandha は、どのように位置付けられているのであろうか。すなわち、我々衆生は——すでに輪廻的存在の中にあり、それゆえ——身口意の三つの行為 (yoga) をすると、それに応じて空間

に存在する業物質 (puṅgala などて非命に属する) が、活命 (jīva) に漏入 (asrava) し、活命と一体となって業 (karma) を形成する。この活命の中の業の形成が bandha (結縛) である。業は相続するので、それを断ち切るためには、苦行 (tapas) によって新たな漏入を遮り (samvara)、古い結縛を滅 (nirjara) するのである。そうすれば、活命は本来の精神性のみを発揮し、自由になる。それが解脱 (mokṣa) である。

さて、TMA 第八章は、bandha についての章であるが、ここにも初期ジャイナ聖典からの影響が認められると言われている。その第四スートラには業の四部門について明示されている。

prakṛti-sthity-anubhava-pradeśas tadvidhayaḥ
(TMA 8-4)

この部門は、本質と止住と威力と微点 (の四種である)。

この四部門については初期聖典にも述べられている。例えば、*Phāṇaṅga* 第四章には次のようにある。

cauvvidhe bandhe pannatte, tanjāhā—pagati-
bandhe tithibandhe anubhāvabandhe padesa-
bandhe /

とか、あるいはまた、

cauvdiche kamme pannatte, taṃjahā—pagadī-
kamme, tthīkamme, aṇubhāvakamme, padesa-
kamme /

とある。

また、第八章の第五スートラには、業の本質 (prakṛti) であるいわゆる業の八分類が示されてある。

ādya jhāna-darśanāvaraṇa-vedanīya-mohanīya-
āyuṣka-nāma-gotra-antarāyāḥ

第一番目 (の本質) とは、智と見の覆障と、感受と愚痴と寿量と個性と類性と障碍 (の業) とである。これら業の八分類についても初期聖典には、散見される。同じく *Thāṇaṅga* 第八章には、

jivā ṇamaṭṭha kammapagadito cīṇīsu vā cīṇ-
anti vā cīṇissanti vā, taṃjahā—ṇāṇāvaranījjaṃ,
darisaṇāvaranījjaṃ, veyanījjaṃ, mohanījjaṃ,
āyamaṃ, nāmaṃ, gottaṃ, antarāṭṭhaṃ /

と見える。

以上の例からだけども、*MAAS* に示されている *bandha* の内容と、初期ジャイナ聖典に散見されるそれとは密接な関係にあることが理解される。

ちい、7 *tattva* の七つの概念からなる用語順位について一般に認められるところである。それでは 9 *padārtha* には順位とくくくが意識されていたのであろうか。順位とは、すなわち (一) *jiva* (二) *ajiva* (三) *pūṇa* (四) *pāva* (五) *āsava* (六) *saṃvara* (七) *nijjarā* (八) *bandha* (九) *mokkha* の順位である。先にとりあげた *Thāṇaṅga* 第九章は、白衣派所伝の初期聖典であった。空衣派所伝の聖典においても 9 *padārtha* の順位の意識はあったであらうか。

三世紀ごろの空衣派の学僧 *Vattakera* の *Mulacāra* は、同派の権威ある聖典である。この聖典の第五章の第六偈には次のように述べられている。

bhūdi' atthenābhigadā jivājivā ya puṇa-pāvaṃ
ca

āsava saṃvara ṇijjarā bandho mokkha ya sam-
mattaṃ (*Mulacāra* 5-6)

一から九の順位について *Thāṇaṅga* 第九章の場合と同じことが確認された。この順位については、他の聖典・論書においても確認され、その順位が厳格に守られていることが知られる。よって我々は 9 *padārtha* における *bandha* が、*nijjarā* と *mokkha* との間に位

置していることを確認する。

二

Sūyagadāṅga は、第一篇と第二篇との二部構成になっているが、その第一篇は、*Ayāraṅga* 第一篇などと共に古層に属する聖典と見なされている。この章以下では、*Sūy I* と *Sūy II* とから *bandha* に関連する資料をとりあげて、*bandha* の起源がどこまで遡り得るかを試みるものである。

Sūy II の第二章と第七章とは、9 *padārtha* の成立に至る直前の状態を示すと思われる資料がある。それは、沙門に付き随う優婆塞達 (*samanavasagā*) が心得ているべき教義の内容となっている。

abhiḡaya-jiva-jīva uvaladdhapuṇṇa-pāva āsava-saṃvara-veyyaṇa-nijjara-kiriya-hikaraṇa-bandha-mokkhakusalā (*Sūy II-2: 7*)^⑨

活命と非命とを了知し、善と惡とを認識し、漏入と遮と感受と滅と行為と工具と結縛と解脱とに通曉したる者は……

これから先ず言えることは、資料では十二の用語から成り立っているが、*veyyaṇa* (*vedana*) と *kiriya* (*kriya*)

と *ahikaraṇa* (*adhiḡikaraṇa*) との三つの用語を除けば、9 *padārtha* となり、その順位も一致を見る。次に気づくことは、これら十二の用語が三つの語群を形成していることである。すなわち、*jiva* と *ajiva* の群、*puṇṇa* と *pāva* の群、そして *āsava* から *mokkha* までの群とである。おそらく、十二の用語としては全体で次第的でありながら、*jiva* と *ajiva* の群、*puṇṇa* と *pāva* の群の独立的要素が残存しているかもしれない。

やっ、7 *tattva* の 9 *padārtha* も共に奇数個の用語から成り立ち、順位も尊重されていた。ところが、この資料をさらに注意深く見ると、偶数個の用語の中、*jiva* は靈魂を意味し、精神性を有する。一方、*ajiva* は靈魂に非ざるもので、非精神性・物質性を有する。そうすれば、*jiva* / *ajiva* の組は、反対概念をもつ用語が組になったと考えられる。また、*puṇṇa* / *pāva* の組については、前者は善性を有し、後者は不善性を有している。これもまた、反対概念の用語が組をつくっていると考えられる。そこで、このような反対概念の用語が一組をつくっているものを、「概念対」と呼ぶことにすると、*āsava* / *saṃvara* と *veyyaṇa* / *nijjara* と *bandha* / *mokkha* 等の組も概念対の可能性がでてくる。

この二つは *veyanā* / *nijjarā* の一対をとりあげてみよう。まず *veyanā* (*vedanā*) の語義については、*dukkha* [感] 受と訳され、苦と楽の両極の感受を意味している。しかし、特にジャイナ教で *vedanā* を言うとき、苦痛の感受を指す場合がよくあり、ここでは苦痛の意味であると思われる。一方で、*nijjarā* (*nirjarā*) は、*dukkha* 滅と訳され、*tattva* の中では、すでに結縛している業の滅を意味する。そして、業滅の場合は苦痛の滅については明言されていない。しかし、この一対の場合は、*veyanā* が苦痛であれば、*nijjarā* はその滅を意味すると考えることができる。*veyanā* / *nijjarā* の一対は概念対として成り立っている。

以上のことがもし認められるとすれば、9 *padārtha* では、[苦]の感受の滅としての *nijjarā* であら、*tattva* では業滅としての *nirjarā* であり、両者の概念に差異が存することになる。

ところで、*Sūy* I の第十二章第二十一偈は、*āśava* / *saṃvara* Ⅱ *nijjarā* / *veyanā* の概念対を支持する偈文だと思われる。

aho vi sattāṇa viuttiṇaṃ ca, jo āśavaṃ jānati
saṃvaraṃ ca /

dukkhaṃ ca jo jānati nijjarāṃ ca so bhāsita-
rihati kiriyavādaṃ // (*Sūy* I-12-21)

下方で衆生に拷問を加えることや漏と遮を知っており、苦と滅を知っている者は、行為論者と呼ばれるにふさわしい。

この二つは *āśava* Ⅱ *saṃvara* とが対になっている。また、*dukkha* Ⅱ *nijjarā* とが対になっている。*dukkha* を苦痛の *vedanā* と解釈すれば、*dukkha* / *nijjarā* は概念対の可能性がでてくる。*āśava* / *saṃvara* の一対は、それぞれが業に無関係であったとしても概念対であると言える。いずれにせよ、右のような偈文が、*Sūy* II-2: 7 のような資料の根拠となったかもしれないことは予想される。

III

Sūy II の第五章の第十三偈と第十五偈から第十九偈までは、前章でとりあげた十二の用語から成る六つの概念対が見られる。では、第十三偈の *jivā* / *ajivā* の概念対から成る資料を見てみよう。

natthi jivā ajivā vā ñevaṃ saṇṇaṃ nivesae /
atthi jivā ajivā vā evaṃ saṇṇaṃ nivesae //

 (*Sūy*

命と非命がなければ、かくのごとく想念もない。^⑬

活命と非命とがあれば、かくのごとく想念もある。

このような形式で、

bandhe / mokkhe (第十五偈)

puṇṇe / pāve (第十六偈)

āsave / saṁvare (第十七偈)

veyaṇā / nījara (第十八偈)

kiriya / akiriya (第十九偈)

が順次述べられてある。

ところで、インドのジャイナ学者 K. K. Dixit は、このような形式の一連の表現は、^⑭ *anekānta-vāda* (不定性論) の初期の先駆と見なされるとする。

かかる *anekānta-vāda* が具体的に何を意味していたのか、今は詳かにしないが、我々が扱って来た五つの概念対がまとまった形で存在することは確認される。

さて、ここで一つ注目しておきたいことは *bandha / mokkha* の概念対が最後には位置せず、*jīva / ajīva* の対と *puṇṇa / pāva* の対との間に位置しているという事実である。この事実は、他の初期ジャイナ聖典にも散見される^⑮ところである。

四

この章では、*Suyagadāṅga* 第一篇から *bandha* に係する資料をいくつとりあげ、*bandha* がジャイナ教の用語として取り込まれると思われる経緯を見てみたい。まず、*Sūy I* の第八章から次なる資料をとり上げる。

dhavī bandhaṇummukke savvato chinṇabandha-
ṇe /

paṇḍola pāvagaṇ kammaṇ sallam kantati an-

taso // (*Sūy I* 8-10)

統御者は、束縛から解放され、一切の拘束を断ち切り、悪業を消散させ、最後に「煩惱の」鍬を抜き取る。

ここでは *bandha* ではなく、*bandhana* という用語が使われている。*bandhana-ummukka* という複合語と *chinṇa-bandhana* という複合語における、それぞれの *bandhana* に語義の差異が存在するのか否かについては詳かにしない。しかし、いずれにせよここでの *bandha-na* の語義は、悪業 (*pāpaka kamma*) の語義に等しいか、あるいは *kāma* 等の煩惱の隠喩 (*metaphor*) と考えられる鍬 (*saṭya*) に等しい語義を有しているかもしれない。^⑯

もしそうであるなら、この偈文における *bandhana* は、特に悪業の語義に近い場合、活命における業の結縛の概念に近いところにあるかもしれない。しかし、決定の根拠はまだない。

次にとりあげる偈文は、*Sūy* I の第四章 (*Itthiparinā* と名付けられている) からのものである。ところで、この章には、故 L. Alsdorf の校訂研究があり、そのテキストを使用する。

*sīham jahā va kunimēnā nibbhayam egacaram
ti pāsēnā /
ev'itthiyāo bandhanāni samvudam egayam ana-
gāram //* (*Sūy* I-4-1-8)

恰も肉「のかたまり」によって、怖れを知らぬ単独の獅子を畏で「捕獲する」のように、そのように、女性たちは、制御した単独の非家「の修行」者を誘惑する。

表現は直喩 (*simile*) である。制御した単独の非家の修行者は、恐怖を知らぬ単独の獅子に照応している。女性達は、そのような修行者を誘惑し (動詞 *vbandh-*) たのであろう。それは、ちょうど肉の餌をしかけてある畏 (*pāsa*) で獅子を捕獲する (*vbandh-*) ようなものである。

この偈文に使用されている *vbandh-* は、描写対象にも比較の基準にも共通して使用されている。いくらりっばに見える主体であっても、一度、煩惱による行為に移れば、取り返しのつかないことになるという隠れた意味を *vbandh-* は含んでいるように思われる。

もう一偈、直喩表現から成る詩頌をとりあげる。

*je etam nābhijānantū micchadditthi anāriyā /
migā vā pāsabaddha te ghāyamesant 'antaso //*
(*Sūy* I-1-2-13)

この「理」を承知せざる邪見の異端者は、無限に死に赴くであろう、恰も畏によって捕獲された鹿のところに。

邪見の異端者は、愚かな鹿に照応する。「この「理」」というのは、この偈文の直前にある偈文で示されたジャイナのある教理のことであるが、それを知らざるがゆえの無智で、無限に死に赴く輪廻状態から脱出できない。それはちょうど畏によって捕縛された鹿のようであると言うのであろう。

直喩の比較の基準の中にある *baddha-* は、*vbandh-* の過去受動分詞である。これは、描写対象の中の *ghāyam esanti* (死に赴くであろう) という動詞句に照応し

ていると考えられる。したがって、描写対象の中には、vandh-に関する語句はないことになる。

五

bandha の成立と起源については、前章で扱ったような直喩表現であるとか動詞形の語句にその発端があると考えている。直喩から隱喩へ移行する間に術語としての成立があると考ええる。

成立について、資料を *Sūy I* と *Sūy II* とに限ったのはクロノロジカルな線を出さんがためであった。*Sūy I* に散見された bandhana という用語については、外教の資料をも考慮にいれて別稿を期す。

註

- ① Suzuki Ohira, 1982, *A Study of Tatvārthasūtra with Bhāṣya, with Special Reference to Authorship and Date*, Ahmedabad, p. 54 ff.
- ② *tatva* を別に句義 *padārtha* と称する場合があることについては、金倉円照、一九四四、『印度精神文化の研究』一〇〇頁。
- ③ S. Ohira, 1982, p. 55.
- ④ 金倉円照、一九四四、一〇〇頁。S. Ohira, 1982, p. 55. など。

- ⑤ *Uttarajñāyā* 29-37 に、このあたりの業論をコンパクトにした表現が見える。

*ajogī naṃ jive navaṃ kammaṃ na bandhai puv-
vabaddhaṃ nijareī //*

- ⑥ S. Ohira, 1982, p. 64 f. ㊦ *Uttarajñāyā* 第三十三章がそのソースであること。

- ⑦ Kiyooki Okuda, 1975, *Eine Digambara-Dogmatik Das fünft Kapitel von Vajrabhāṣa Mūlācāra herausgegeben*, Alt- und Neu-Indische Studien 15, Wiesbaden, S. 37.

- ⑧ Kundakunda の作㊦ *Pañcāṣṭhāyā* 116 ㊦ *Haribhadra-Sūri* の作㊦言われる *Prasamavati* 189 ㊦ *Yasodeva* の *Nava Tatva* の冒頭部分には 9 *padārtha* がみられるが、いずれも順位に異同はない。なお、直前の状態を示す資料として *Isibhāṣyaṃ* 第九章も考察されるべきであろう。谷川泰教、1987、『*Isibhāṣyaṃ* 第九章の研究』、『高野山大学論叢』第二三巻参照。

- ⑨ バラレルが他の初期ジャイナ聖典に散見される。Viyā-hapannāṭṭisūta 2-64; 14-112, *Nāyāhammakahā* 1-5, *Uāsagadāsā* 1-31, 55, 56 ㊦。

- ⑩ *jīva / ajīva* は、ジャイナ教の開祖マハーヴィーラに先だつて二五〇年といわれるパーサ（パールシュバ）の創始になるといふ伝承がある。

- ⑪ āśava / saṃvara が互いに対立概念であることを、次の論文参照。榎本文雄、1979『āśrava (漏)の成立について——主にジャイナ古層經典における——』、『仏教史学研究』第二二巻第一号、八七頁。

⑫ 長崎法潤、一九七四、「ジャイナの業思想」『仏教学セミナー』第二〇号、四一二頁等参照。

⑬ 想念 (saṃā, saṃjñā) のふたつの意味は、覚智と信心なりとある。

⑭ K. K. Dixit, 1978, *Early Jainism*, p. 39.

⑮ *Thāṇāga* 例えは、第一章の冒頭部分。ただし *jīva* / *ajīva* の対はならぬ。同じく第二章の冒頭部分参照。

⑯ *salla* (*śalya*) については、杉岡信行 (旧姓煎本)、一九

八七、「*śalya* と *salla* について」『宗教研究』第六〇巻第四輯、二七一号、一六六一―一六七頁参照。

⑰ Ludwig Alsdorf, 1968, *Itthiparinā. A Chapter of Jain Monastic Poetry*, II/ 2, S. 249-270.

⑱ 同様の直綴は、*Sūy* I-4-1-9 に *baddhe mie va pāse-ṇaṇ* と、*Isibhāsyaṇ* 21-2 に *miga bajjanati pāsehiṇ* などがある。また、仏教文献では *Suttantiṭṭhā* 39 に *mi-go*…… *abaddho* と遊の場合がみられる。